

**<随想>魂の養族たち,あるいは,バース・オブ・ア・
フェザー : 立石伯『北京の光芒・中蘭英助の世界
』に思う**

著者	田中 益三
雑誌名	日本文学誌要
巻	58
ページ	78-79
発行年	1998-07-11
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020030

魂の眷族たち、あるいは、バーズ・オブ・アフエザー

——立石伯『北京の光芒・中蘭英助の世界』に思う

田中 益三

少し唐突かもしれないが言ってしまう。齢を重ね、風貌が柔和になろうとも、かつて自らの野性ゆえに、身を焦がすような自己昇華と自己救拔との、苦痛と歓喜を知る者ならば、その野性は、究極、飼い慣らされはしないものだ。胸奥に秘められ、今はそれが風いだ状態にあるというに過ぎない。論者＝立石伯と対象者＝中蘭英助のどちらにも、それを感じるが、こう言ったからといって別に礼を失したとは思わない。

「彷徨者」「途上人間」「寄留者」。中蘭英助自身、様々に自らを規定している。それは行動の衝迫を知り、「場所と定式とを求めようとあせりながら、さまよったのだ」（ランボオ）という自己定位に向けた、ある生存のかたちなのだ。『地獄の季節』一篇を書き上げ、言葉の精錬との格闘を、この一篇に封じ込め、アフリカへ去って行ったランボオという詩人。この伝説の妙味に大いなる遺産を感じ取ったのが、ほかならぬ中蘭英助であった

し、立石伯であったと思う。

スタート時の二人の個性に野性が色濃く付着しているのは、ランボオ的反抗の原質への親和力であって、旅立て！という命題に敏感な、生温い自己への否定と新たな地平に向けた衝動があったからだろう。だが、両者の出立者・途上の人・寄留者という種々相は、まずもって表現者となることであり、しかも、持続者であることを自らに課している。それは青春の文学的な遭遇感覚を手離さないこと、それが両者のそれぞれの志向を支えてきた。そして、埴谷雄高の警咳（けいがい）に接し、見出された二人の者は、時をおいて歩み寄りはじめ、そしてここに交錯した。

とは言え、もはや中蘭英助と立石伯とは、自らの野性の行方を見定める、遠望する位置に立っていて、共に初期の頃に持っていた、荒ぶる心の思いを前進的に開示する、というようなかつてのスタイルは取らない。自らの原質に拠りながら、再燃していく心の燠火を沈着に見据え、捉え直す、という方向に変位する。いわば、嵐の時期＝若年期の持つ意味を風ぎの時期＝現在によって再点検していく。

ランボオの文学的な自裁に屈しないで、中蘭英助が『彷徨のとき』『夜よシンバルをうち鳴らせ』を通じ到達した現在のもう一つの地平（『北京飯店旧館にて』など）。それは立石伯が『埴谷雄高の世界』『高橋和巳の世界』を通じ到達したもの、具体的には、この『北京の光芒・中蘭英助の世界』に繋がっている。それは想像力と実在の交錯から、実在そのものへの睥睨、歴史と天地間の一微粒子である人間・個人への緩やかな回帰だった。

過去のイルミナシオン＝明滅するもの。そこから遠望する、わが身と人のありよう。それは両者の視界明瞭な文章にも表れている。ただ、それを引例する暇は今はない。

ベートーベンの第九シンフォニーの合唱テキストになった、シラーの「歓喜に寄す」の一節には「徳行のけわしい丘の頂上へ／喜びは忍苦の歩き手をみちびいてゆく」というものだった。こういう大時代的表現に拠らなくとも、歓喜＝喜び、即ち、ここでは書くことの喜びは、忍苦の辛さを帳消しにするのだと言つてよい。それが視界明瞭な現在において計量されながら、紙面に定位されていくのである。忍苦というならば、それを相対化する確たる眼差しによって遠望し、語り出すのだ。忍苦の自身は、差し当たっては体験の受苦による自己と世界の計量、そして、語り出さねばならない高ぶり、恍惚、不安。言ってみれば、シラー流のクラシックな方法、即ち、苦痛・苦悩を通じて歓喜に至る、という求道者的な方法は濾過されていく。かつての両氏は「忍苦の歩き手」だった。だが、同じ魂の眷族は今共に見界明瞭の歩き手＝明察者となっている。

中蘭英助が淪陷区（被占領地区）北京にいた体験を、近年の小説連作やエッセーにおいて語り出すこと。それは、まぎれもない実在であった不思議なエリア、淪陷区の政治の席卷、異邦人を含む人々の命運などへの等身大の認識においてであり、秘された暗部へ向けて照射し続けられる質のものだった。

立石伯が、本格的な中蘭英助論の初めての書き手となって、ここに開示したのは、竹内好の『中国文学』と、ここに、ほぼ全容が明らかになりつつある、中蘭英助の属した『燕京文学』

との対比・解明であって、その実在した意義と、時代の奔流とといったものを射程に据えている。戦時下の日中文化摩擦といった点にも目配りが利いている。そして、何よりも、中蘭英助という忍苦の大歩行者に共鳴・共振している。近作も含め、ここにその全貌が明らかにされた意味は大きい。

最後に、現代アイルランドの詩人、T・キンセラの「苦悩の木」の一節を引く。

私は再び夢見た。

（略）

二つの幹を持った黒い木

二本の木が共に育つて 一本の木となった
枝々は雨にかすんで天を突く

二つの幹は成長の微少の踊りの中で
完全に一つになった 二つの結合は
ゆっくりとねじれ傷跡を残す それを私は
雨の中に見る……

（水崎野里子・訳）

以上、別に他意はないけれど、お二人の交歓を羨みながら
……。

（たなか ますぞう・文学部講師）

※ ▽一九九八年三月・オリジン出版センター

・二四〇〇円＋税

△著者＝文学部教授